

仲間と課題に向き合い、共に運動のもつ面白さを追求する中で、成長を実感し、夢中になって運動する愛顔あふれる子どもを育てる

愛媛県西条市立橋小学校 白石 純 一

1 テーマ設定の理由

リレーは、バトンの受渡しの技能の高まりとともに、記録へ挑戦する楽しさを仲間と味わうことのできる運動である。一方で、個人の技能差が結果に表れやすく、運動が苦手な子どもは意欲が高まりにくいという一面もある。そこで西条市小体連では、どの子どもたちにも運動に進んで参加し、運動の本質的な面白さを仲間と追求することができるよう、1年次では中学年について、2、3年次では高学年について「陸上運動（短距離走・リレー）」の実践研究を行った。これらの実践を通して、全ての子どもたちがリレーの面白さを味わったり、運動の多様な楽しみ方に気付いたりできる指導の在り方をより具体的に提案できるのではないかと考えた。

テーマにある「仲間と課題に向き合う」とは、子どもたちが仲間と関わりながら学習課題に気付き、自然に対話を重ねることで、課題解決に主体的に取り組む姿を示している。次に、「共に運動のもつ面白さを追求する中で、成長を実感する」とは、誰もが「分かる」「できる」喜びを感じながら、運動のもつ本質的な面白さを味わい、身に付けた力を次の学習に生かしていく姿を示している。このような観点から、夢中になって運動する愛顔あふれる子どもが育つであろうと考え、本テーマを設定した。

2 研究の視点

(1) 教材とつながる

子どもの実態に合わせて教材や単元構想を工夫したり、運動の面白さを追求する素地づくりに取り組んだりすることによって、子どもの学びを深めていけるようにしたいと考えた。

仮説 どの子どもも運動のもつ面白さを感じられるよう教材や単元構想を工夫したり、より主体的に主運動につながる動きを身に付けさせたりすることができれば、「分かる」「できる」喜びを味わいながら運動しようとする愛顔あふれる子どもが育つだろう。

(2) 仲間とつながる

学級の支持的風土を高める学習環境を整備し、子どもが自然と仲間との関わりを求めたくなるような学習課題や運動場面を設定することによって、協働的な学びの質を高めていきたいと考えた。

仮説 仲間との協働的な学びを充実させたり、仲間とのつながりが深まる学習環境を整備したりすれば、仲間と共に喜びを感じながら運動しようとする愛顔あふれる子どもが育つだろう。

(3) 自分とつながる

子どもが成長を実感できたり、教師が適切な場面で子どもの学びを価値付けたりすることによって、学びの成果を自信にして次の学習を自ら求めていくことにつなげていきたいと考えた。

仮説 次の学習へ動機付ける評価の在り方や、子どもが主体的に学習の締めくくりを「つくる」ための手立てを工夫すれば、次の学習を自ら求めようとする愛顔あふれる子どもが育つだろう。

3 研究の実際

(1) 教材とつながる

ア どの子どもも運動に進んで参加し、運動の本質的な面白さを感じられる教材の工夫

(ア) 子どもの実態に合った教材の工夫

誰もが安心して楽しく取り組むことができるように、競走よりも記録の達成と伸びに重点を置いたリレー教材を開発した。まず、子どもが走るトラックは1周 100mのサークルの形式を採用し、1人あたりの走行距離は半周の50m程度とした。また、スタート位置を対角に設置することで、他者にバトンパスを邪魔されたり、抜かれたりする心配もなくなるため、どの子どももバトンパスに集中できる場を用意することができた。

次に、バトンパスの方法について工夫した。3年次の6年生の実践では、リレー経験が乏しい子どもの実態に合わせ「アンダーハンドパス」によるバトンパス方法を採用した。アンダーハンドパスは、普段の走る姿勢に近い状態でバトンパスができるため、どの子どもにも安定したバトンパスの技能を身に付けることができた。3年次の子どもの意識調査においても「リレーは楽しかったですか。」という質問に対して、9割以上の子どもが肯定的に答えていた。

(イ) 運動の多様な楽しみ方に気付かせる単元構想の工夫

まず、ねらいに沿って単元の前半と後半で活動内容を分けることとした。単元前半では、「手つなぎリレー」「肩タッチバトンリレー」などの活動を行い、基本的なバトンパス技能の向上をねらいとした。単元後半では、「えひめ子どもスポーツ IT スタジアム」を活用した。その際に、本来カーブであるテークオーバーゾーンを直線とする変形トラックを採用したことで、単元前半で身に付けたバトンパスの技能を十分生かす子どもの姿が多く見られた。

次に、運動を楽しむための合い言葉「5S」を設定した(資料1)。また、2、3年次には、単元前に「応援」に関する授業を実施した。この事前授業を実施することで、体育の授業内で応援する姿が多く見られるようになった。3年次に実施した子どもの意識調査においても、「See (みる)」「Support (支える)」の関わり方で楽しんだ子どもの割合が上昇した(資料2)。

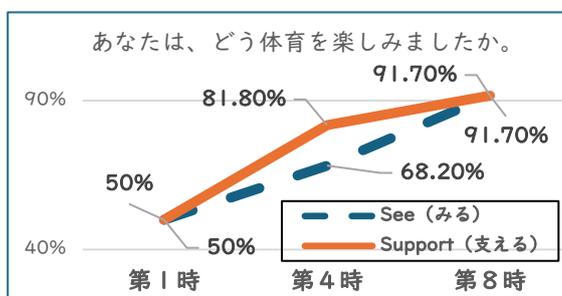
イ 運動の面白さを追求する素地づくりとしての「西条パッケージ」

「西条パッケージ」とは、体づくりや動きづくり、心づくり、感覚づくりなどをねらいとしながら、音楽に合わせて準備体操や主運動につながる下位運動を行う活動である。2、3年次からは、子どもが組み合わせて作ったオリジナルの準備体操と基本的な走の動きやバトン操作などの下位運動を組み合わせた「陸上運動パッケージ」を取り扱った(資料3)。毎時間継続して行うことで、子どもたちは、楽しみながら多様な動きに慣れ親しんだり、基本的なバトンパスの技能を習得したりすることができ、主運動の「できた」「分かった」という達成感につながった。

4S	意識する視点
する Sports	練習や競技中に、技能の向上を目指して運動する。
みる See	友達の競技を見るときに、その友達に対して言葉掛けや関わりをする。
支える Support	円滑に競技を行うために、審判をしたり友達への助言をしたりする。
知る Study	運動の行い方やルール、歴史等について学ぶ。

これらを満たす最上(=西条: Saijo)の姿 **5S**

(資料1) 合い言葉「5S」



(資料2) 子どもの意識調査の結果

今日の中川パッケージ (オロナミンC)	
①	腕立て足入れ替え
②	マリオネット
③	体後出しじゃんけん
④	じゃんけんぐるぐる
⑤	肩ストレッチ
⑥	振り返りバトンキャッチ

(資料3) パッケージ例

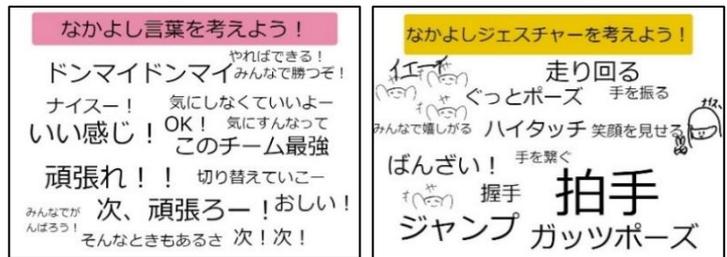
(2) 仲間とつながる

ア 仲間との協働的な学びを充実させる教師の働き掛けの工夫

子どもが仲間との対話を通して練習を選択できるように、動画と解説付きの練習メニューを作成し、子どもに配付した。動画を視聴する頻度が高かった授業後の子どもの意識調査においては、「あなたのグループは、今日の課題（めあて）を解決することができましたか。」という質問に対して8割以上の子どもが「はい」と答えていた。この結果から、選択する環境を整えたことで、子どもの自然発生的な対話を生み、チームの課題に合った練習につながったと考えられる。

イ 仲間とのつながりが深まる学習環境の整備

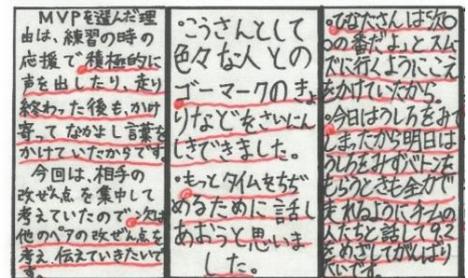
肯定的な言葉掛けと動きで学級内の支持的風土が高まるよう、「なかよし言葉」と「なかよしジェスチャー」を設定した（資料4）。子どもが意識して使う環境を整えたことで、肯定的な言葉掛けやジェスチャーが自然発生的に増え、安心して体育を楽しむ雰囲気構築が築かれていった。



（資料4）「なかよし言葉」と「なかよしジェスチャー」

また、子どもの意見から、ペットボトルを使った応援グッズ「なかよしグッズ」を製作し、授業で活用した。このなかよしグッズを活用することで、クラスが一丸となってチームリレーに取り組む雰囲気がより強くなった。

そして、1～3年次における子どもの意識調査と子どもの振り返りシートにも仲間と関わりを深めていこうとする結果や記述が見られた（資料5）。このことから、支持的風土が高まるような環境を整備することが仲間とのつながりを深め、子どもたちの協働的な学びを促進したと考えられる。



（資料5）子どもの振り返りシート

(3) 自分とつながる

ア 成長を実感し、次の学習へ動機付ける評価の在り方

(ア) 仲間と共に学びの成果や課題を振り返る活動の工夫

毎時間授業の終末に振り返りの時間を確保し、「よかったこと・できたこと」「課題・次に挑戦すること」をチーム内で話し合い、ミーティングボードに記入して全体で共有した。子どもは授業での活動の様子を振り返り、話し合いを通して次時につながる振り返りができた。

(イ) 子どもが自らの成長を実感できるための工夫

バトンパスの上達を実感できるように、ビフォーアフター動画をタブレットで撮影した。また、授業後の自己評価については、1、3年次は「ルーブリック」、2年次は「評価チェックシート」を作成して活用した（資料6）。ルーブリックの一部の評価項目については子どもたちと検討し、子どもの実態に合った評価内容を決定した。さらに、自己評価をレーダーチャートに表し、授業ごとの学びを可視化した。このレーダーチャートの広がりやビフォーアフター動画を見比べることで、子どもは自らの成長を見取ることができた。

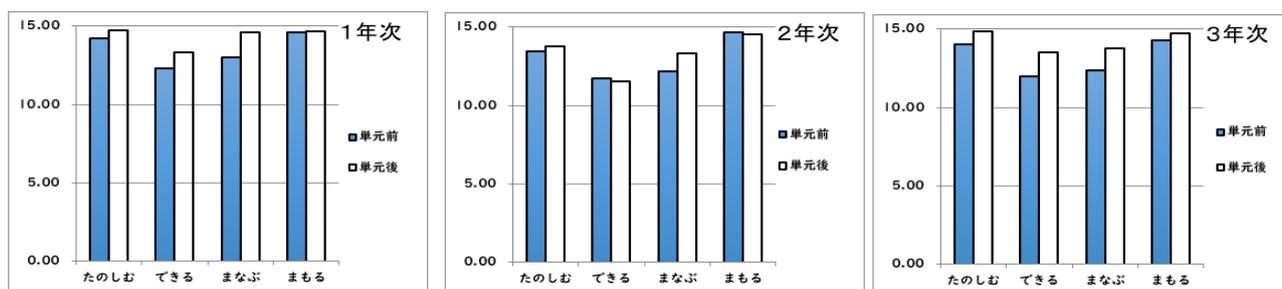
	S (さいこう)	A (やったね)	B (まあまあ)	C (ファイト)
運動したよ	一生懸命応援したり、積極的に友達に声を掛けたりしながら、進んで運動できた。	積極的に友達に声を掛けながら、進んで運動できた。	進んで運動することができた。	進んで運動に取り組もうとできなかった。
関わったよ	「なかよし言葉」や「なかよしジェスチャー」をたくさんの人に使うことができた。	「なかよし言葉」や「なかよしジェスチャー」を、いつも使っていることができた。	「なかよし言葉」や「なかよしジェスチャー」を使うことができた。	「なかよし言葉」や「なかよしジェスチャー」を使えなかった。
考えたよ	自分や仲間の課題を見付けて、その解決方法を考えた。	自分や仲間の課題を見付けた。	自分や仲間の課題について考えた。	自分や仲間の課題をあまり考えなかった。
できたよ バトンパス	なるべくスピードを落とさないようにタイミングよくバトンの受渡しができた。	タイミングよくバトンの受渡しができた。	バトンを落とさずに受渡しできた。	バトンの受渡しができなかった。

（資料6）子どもの実態に合ったルーブリック

イ 子どもが主体的に学習の締めくくりを「つくる」ための教師の働き掛け

子どもたちが達成感や納得感を得て単元を終えられるように、子どもたちと共に学習の締めくくりとなる活動を単元の終末に位置付けた。「これまでの成果を他学年にも見てもらいたい」「アンダーハンドパスの方法を知ってもらいたい」という子どもの思いから、2年次からは他学年を巻き込んだ活動を子どもと共に考案した。教師は次の学習を求めていこうとする子どもの思いを促す声掛けや環境を整備しながら、伴走者としての役割を果たすことができた。

「つくる」活動が子どもの心情面にどのような影響をもたらすかを見取るため、単元の前後で診断的・総括的評価を行った(資料7)。1～3年次の結果を比較・分析すると、子どもたちの「できた」「分かった」という充足感や仲間と体を動かす楽しさを味わうことができていることが学習を締めくくる活動をつくらうとする意欲になり、深い学びへとつながっていると考えた。



(資料7) 1～3年次の診断的・総括的評価の比較・分析

4 研究の成果と課題

(1) 教材とつながる

ア 成果

- 子どもの実態に応じて教材や導入を工夫したことで、どの子どもにもリレー教材のもつ本質的な面白さを味わいながら、バトンパスの技能を高めることができた。また、応援に関する事前授業や、手作り応援グッズは子どもたちの愛顔をより引き出すことにつながった。

イ 課題

- 中、高学年での授業実践はできたが、低学年での授業実践ができていない。低・中・高学年での系統的なリレー教材の指導の在り方については、更なる研究を積み重ねていく必要がある。

(2) 仲間とつながる

ア 成果

- 学習環境の整備や肯定的な言葉掛けと動きによる支持的風土の高まりが自然発生的な対話を生むことにつながり、課題解決のための協働的な学びの質を高めることができた。

イ 課題

- 子どもたちが課題解決に合った練習メニューを適切に選択できたか、また、どのようにして思考が深まっていったかを見取る方法については思案していきたい。

(3) 自分とつながる

ア 成果

- 成長を視覚化することで、自分やチームの成長を実感することができた。また、学習の締めくくりを子どもたち中心に実施したことで、愛顔あふれる活動で単元を終えることができた。

イ 課題

- ルーブリックの自己評価が適切にできていない子どもやチームに対し、適切に評価できるように、どの状態がS評価となるのかなど、教師の丁寧な見取りと声掛けが必要である。